

森の民話茶屋通信

Vol.17



『総合学習』大玉中1年生と患者の会の代表者とのスナップ。



FTVLIばんの新コーナー“ふるさとあったか便”の記念すべき第1回目は“森の民話茶屋”からでした。

『ふるさと』の民話とふるさとを森をつないで…』

店主が！村のオウチ子 Vol.16

来日半年、玉井小と大山小の英語の先生
チャールズ・ルーティンズさん(34才)
(オーストラリア出身)



今年、あまりの忙しさに『森の民話茶屋通信』の発行が遅れていて、急いで発行をと思いながら店主の原稿をパソコンで編集してくれている大山の斎藤酒店のからおりさん宅へ走った私が、店に入ると何ともセンスの良い背広を着たハンサムな青年が買物をしていたのである。

今年四月から玉井小(月・火・水)、大山小(木・金)で英語の先生をしているチャールズさんとのこと。背広のポケットに濃い臘脂色(えんじいろ)のチーフが素敵である。それを何年振りに使う英語の単語を必死に思い出しながら「フアンタスティック!」と取り敢えず言うとは分かって下さったのか、「秋の色だから…」と(勿論

買った日本語は『さすけねえ!』

英語で「真っ直ぐな目で答えてくれる。店主が走る」のコーナーのインタビュを誰にするか悩んでいた私は、早速インタビュをすることに…。

Q/村の第一印象はいかがでしたか?
チャールズさん(以下チ)/空気が良くて、静かで、平和な感じで、自分のふるさと(オーストラリア南西部のパース市)に似ているという印象でした。

Q/小学生の印象は?
チ/可愛い、愛らしい、そして元気。

Q/先生方の印象は?
チ/仕事が忙しそう。そしてプロとしての意識を強く自覚している。僕に対してはとてもフレンドリーに親しみを持って接してくれている。

Q/日本に来たきっかけは?

チ/小さいときから日本に行って仕事をした。い…と思っていました。

Q/何故?
チ/近代的なとても素晴らしい国だと思ったから。

Q/兄弟は?
チ/9人家族。両親と姉が2人、妹が4人。僕ひとりだけ男の子です。

Q/一人息子?両親やあなた自身は淋しくないますか?
チ/NO! (きつぱりと)

Q/先生の仕事は楽しいですか?
チ/とても楽しいです。

Q/生活で困っていることは?
チ/何も無い。僕は料理も得意、好きですから。(感心、感心)

Q/好きな食べ物は何?

チ/そば、うどん、みそ汁、パスタ、納豆も大丈夫。

Q/好きな果物は?
チ/梨、りんご、桃、キウイ、何でも好き。スーパーマーケットで買える。

Q/村の文化祭(11月1日夜7時30分)で歌うんですって?
チ/ヒロシ・ヤスタと一緒に。(安田広志さん、大玉村のスター)

Q/どんな歌を歌うのですか?
チ/「荒城の月」「ケ・セラ・セラ」「ラブミーテンダー」「カントリー・ロード」。

Q/へえ、そうですか。
チ/「ラブミーテンダー」/ラブミースウィート!」と突然歌ってくれる…優しくて良い声で

Q/プレスリーが好きなのですか?

チ/YES!

—今度、神原田の神社のお祭りに行くこと、ジャンボかぼちゃの大会に行くことなどを話す彼を見て、まだ村に住んで半年なのに、すっかり村の中に溶け込んでいる彼に驚いたり感心したりである—

Q/長い時間をインタビュに使ってしまい、すみませんでしたね。
チ/(これだけは、はつきりとした日本語で)さすけねえ!

—本当に何十年振りの英単語を並べただけのインタビュでした。傍らの雅子さん(辞典を片手に)に助けて頂きながらようやく何とかになりました。それにしても日本語を思い出すのさえ不自由になって来つつある私です。で、英単語が出てくる訳も無く…ああ、疲れた。でも、痛み付きになりそうですよ。何とか耐えたのですから…。

MAP



店主スケッチの「森の民話茶屋」
クロスカントリースキーステーション

愛され4年目を無事終えます。

10月のある日、営業日でないのに所用があって茶屋にいと次々とお客さまが訪れて下さいました。

「テレビで見たので探しながらきました」と言ういわき市の方。東京からのお友達を案内して「福島にもこんなお店があるのよ」と嬉しそうに話される方は福島市内から。用事が済んで戸締まりをしようと考えていると親子3人連れが「今日は開店しないんですか？」とスロープを上がってお出でになります。折角お出で下さったのに申し訳なく思いながら、土・日・祝日だけの店であることや、茶屋からの眺望、阿武隈山脈のこと、2階の席から間近に見える安達太良山の頂上のこと等をそれぞれにお話をしました。

折からのすっきりした秋晴れの空に美しい紅葉が映えて「森の民話茶屋にいる」だけで十分に心が癒されるのだ…とつくづく思いました。

今年の夏は空の青さを忘れてしまうほど日照時間が少なく、米の作柄が心配されましたが、今収穫の時期を迎えてその心配が現実となりそうという声が聞かれます。生産者にも消費者にも良いことになるよう願わずにはられません。

そんな天候不順の影響もあってか、夏の間の「森の民話茶屋」はいま一つ賑わいに欠けた感がありましたが、秋に入るや大勢のお客さまに恵まれてスタッフ一同ホッとしたものです。ありがとうございました。

そんな訳で4年目を終えようとしています。今年はお陰さまで2000人を超えるお客さまのおもてなしすることができました。間もなく10月も終わりになり、「森の民話茶屋」も来年の春までお別れになります。ちょっと寂しい気がするスタッフたちです。

つい先日の日曜日、閉店近い時間に見えられた4人家族の方々は若松市内からとのことでした。民話を二つ程聞いて頂き、49号線に出る道順を教えて差し上げました。最後に店を出た若いお嫁さんが振り向いて、「来年も開いて下さいネ」と笑顔で帰って行かれました。その優しい言葉と声に思わず涙がこぼれそうになったのは、私の年のせいだったのでしょうか。「来年も又逢いましょうね」と約束してお別れしました。

楽しい時間は早く過ぎる…と言います。この6ヵ月を夢中で楽しく過ごした私たちです。次の6ヵ月までスタッフ一同充電の時間を持ち、より楽しい「森の民話茶屋」になるよう乞うご期待です。

平成15年10月末日 店主 後藤 みづほ 敬白

寄せられた感想ニガ：

総合学習in森の民話茶屋



□大玉中1年生(8月28日)
□玉井小3年生(9月12日)

民話茶屋の体験を通して

薄 奈津美

私は普段民話のことは全然知りませんでした。でも「森の民話茶屋」に行くととてもたくさんの方が分りました。

まず、民話は心のおくから語ることです。民話は昔から伝えられてきた文化だから、やさしい気持ちで語らないとそれは朗読になってしまうということを感じました。

その他にも工夫がほどこしてあり、ビックリしてしまいました。お店の中は木のテーブルでやすらぎ感を出し、お花で風景を出していました。そういった身近な事でも一つひとつ工夫がありました。

民話茶屋には、山の自然の水を使った飲み物や食べ物を食べに来る人や、みづほさんの民話を聞きに来たという人もおとずれます。民話だけでなく、やすらぎをあたえている面でもすごく輝いているし、民話茶屋をボランティアでやっている人も楽しそうにやっている様子で、人のためでもあり自分のためでもあり、すごい事だなと思いました。

「民話をやろう」と言われた時は私も恥ずかしいからやりたくないと思いましたが、体験してみると、とても楽しいし、昔の人になった様な気持ちでした。

私は家に帰り、家族に聞いて聞かせると、「まだまだだめだなあ」と言われてしまいましたが、そのぶん会話がはずみました。

民話は今の時代、忘れていくのが多いけど少しずつもっともっとたくさん増やしてゆきたいです。

「森の民話茶屋」で体験したこと

野内 友里恵

私は、8月28日に初めて「森の民話茶屋」へ行きました。民話に興味があったのと、毎月の通信を見て、一度行ってみたいと思っていたからです。「民話」と「接待」という体験ができるということと、とてもはりました。この体験で思い出に残ったことがいくつかあります。

一つは、後藤さんの「民話の語り方」です。私たちみたいな語り方ではなく、はく力があがり、声も変えることによって聞いてる人を民話の世界にすいこんでいく所がすごいなあと思いました。後藤さんのように話せるようになりたいです。

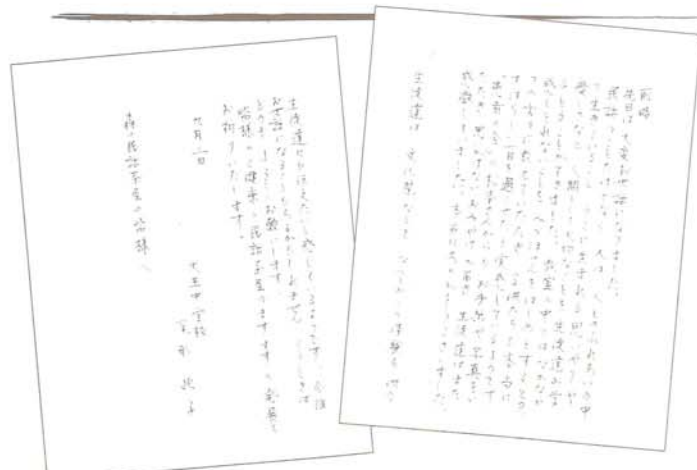
二つ目は、初めて「抹茶をいただいた」ことです。私は今まで抹茶をいただいたことはありませんでした。でも、「森の民話茶屋」を通して、飲み方から最後まで正しく、おいしく、いただくことができました。このような貴重な体験をさせていただき、ありがとうございます。

ました。飲み方は今でもきちんと覚えています。

三つ目は、『みなさんが気づく、いろいろな所にかざった、あいつをさがさずしていろいろを見て、感じました。だから店内があたったかい空気で包まれていたのだと思います。とても過ごしやすかったです。』

こうした所で一日を過ごし、体験するのは初めてのことでとまどいもありました。だけれど、後藤さんを始め、スタッフのみなさまに助けられて仕事をなんとかこなし、最後には自分で民話を朗読するという、よい体験もさせてもらいました。この体験では、民話をもっと広めていきたいというみなさんの気持ちが伝わってきました。これからは、私たちが民話を伝えていけたらいいなあと思っています。

今度は、家族や友達とくつろぎに行けたらいいなあと思います。本当にお世話になり、ありがとうございます。



引率の尾形先生からのお手紙。